

# 中国共産党における「毛沢東思想」の創出と

その凝集力 —— 1943年～1945年を中心として ——

徳 田 のり 之

- I はじめに
- II 毛沢東崇拜の噴出：1943年
- III 党史の検討
- IV 毛沢東の思想から「毛沢東思想」への転換
- V シンボル創出の対外的条件
- VI 党指導部内での毛の思想の評価
- VII 毛沢東の思想の凝集力

## I はじめに

1935年1月の遵義会議に始まる中国共産党内における毛沢東のリーダーシップとイデオロギーの成長過程について、筆者は本誌において時期を分けて既に3回にわたって論を進めてきたが<sup>(註1)</sup>、本稿はその第4回目に当たり、これをもってこの問題についての筆者の一連の試論的概観は完結する。

本稿で検討を試みる問題は、第3論文の後をうけて、延安整風運動の末期に噴出してきた毛沢東崇拜が、党史学習運動を通じて理論的基礎づけを与えられ、党のイデオロギー・神話としての「毛沢東思想」の創出において、結実する過程である。そして最終的にはこの「神話」の内容や性質、および党の指導グループの内部におけるその凝集力——毛という特定の指導者の名に結びつけられた教義が、集団にとっての共有の信条体系となることによって、いかに集団の連帯性を強めていくか——に内包される微妙な政治的力学が、問われる

ことになるのである。それらの検討は、また、筆者が第1論文の冒頭において提起したすぐれて現代的な問いに対する一つの回答ともなるであろう。では次に、そうした議論のここでの出発点である1943年から中共党内の動向の分析に、直ちに入ることにしよう。

(注1)「中国共産党における毛沢東の権威について」(1)(II)、『アジア経済』、1970年1月、1970年9月)、「延安整風運動と毛沢東のカリスマ化」、『アジア経済』、1970年12月)。

## II 毛沢東崇拜の噴出：1943年

1943年は、毛沢東のリーダーシップの勝利を確定した年であった。この時期になると1941年以来抗日根拠地において、毛沢東のイニシアチーブのもとで精力的に推進されてきた大衆動員の諸政策が、効果を現わし、根拠地は深刻な「危機」をのり切ったことが、ようやく明らかとなった。好転しつつある情勢をみながら毛沢東は、1942年12月の陝甘寧辺区高級幹部会でのかれの経済と財政問題についての報告の中で、「1941年—42年12月の第二段階で、生産自給の基礎は完全に確立した」し、「われらはすでに困難を突破し、また、突破しつつある」とのべた<sup>(註1)</sup>。朱徳も1945年4月の軍事問題についての報告の中で、この時期を回顧して、「1942年の冬、冀中、冀南、冀東の各解放区工作は回復し、華北解放区は再び拡張の新しい

時期にはいった。(中略) 解放区を發展させ、抗戦以来の新記録を作った。次いで、陝甘寧辺区より開始された偉大な整風運動と偉大な生産運動は、各解放区でもこれにない、好成績を収めた……」(註2)とのべている。これらの「実績」は、ウェーバー(Max Weber)の概念枠組(Scheme)に従えば、毛沢東のリーダーシップの有効性の大衆へのより直接的で具体的な「証し」(proof)となったであろう。かくして、指導者の実践的政策の成功という事実に支えられながら、整風運動によって生まれた党内におけるイデオロギイ的発酵の頂点において、毛沢東崇拜が一挙に大量に噴出するのである。それは、1935年以來の毛沢東の指導権の歴史からみると、まさに「革命的な変化」ともいべきであった。そして、この時から毛沢東のリーダーシップは、明らかにカリスマ的な性格を帯びるのである。それは、毛沢東の中国共産党への完全な支配をめざした大突進(Big Push)が、成功のうちに結実したことを示していたのである。

毛沢東崇拜は、1943年7月の中共成立22周年記念論文——多くの党の指導者たちによって書かれた——の中に、せきを切ったように現われている。まず、劉少奇は、党の22周年記念に際しての主論文の執筆者に選ばれるや、7月6日に「毛沢東思想」というタームをおそらく初めて党内で用いた熱烈な(1945年の報告におけるほどではないとしても)毛沢東擁護の論文「党内のメンシェヴィズムを一掃せよ」を発表する。劉はその中で、かれらは「22年にわたる革命闘争のすえ、ついに自らの指導者として、毛沢東同志を見いだすことができた」といい、党員は「毛沢東同志の中国革命や、その他の問題についての教えを注意ぶかく研究し、学習しなければならず」、「毛沢東同志の指導をわれわれの活動のあらゆる環境あらゆる部門に滲透させ

ねばならない」とのべたのである(註3)。劉少奇はおそらく1943年の春、張聞天に代わって中央書記処書記の1人に任命されるや(註4)、1941年までの毛沢東崇拜への消極的な態度を大きく変え、毛についての個人崇拜の積極的な演出者へと自らを転換させていったようにみえる。劉少奇以外の論者の中には、朱徳、周恩来、康生、博古、徐持立、王稼祥、陳毅、岡野進(野坂参三の別名)などが含まれていた(註5)。これらの指導者たちの賛美の言葉の中で特に注目されるのは、王稼祥の発言であろう。王は1943年7月8日の論文「中国共産党と中国民族解放の道路」において、劉少奇の“新語”を援用して、「毛沢東思想は中国のマルクス・レーニン主義であり、中国のボルシェビズム、中国の共産主義である」とのべ、毛沢東思想を「創造的マルクス主義」、「マルクス・レーニン主義の中国における發展」と定義したのである(註6)。王稼祥のこれらの定義は、1939年9月のかれの論文における定義の發展ではあるが(註7)、いうまでもなく劉少奇がそれから2年後の七全大会において下した毛沢東思想についての有名な定義の原形をなすものであろう。ここに運動にとっての一つの“象徴”が生まれた。博古も7月13日の『解放日報』において、「毛沢東の旗幟のもとに、中国共産党を守るために戦え」と題する小論を発表し、その中で、「最後に、極めて重要なのは、われわれには党の領袖で中国革命の舵手——毛沢東同志がいることだ。かれの方向は即われわれ全党の方向であり、また全国人民の方向である」とのべたのである。このような毛沢東への周囲の指導者群の態度は、ウェーバーの言葉を使えば、「舵手」に対する「信仰的帰依」を示すものであろう。周恩来もまた8月2日の演説で最も明白にこれを表わしている。すなわち、周は「過去において毛沢東同志の

指導と意見に反対したり疑いをいだいたりした人たちのすべてにとって、現在ではそれが誤りであったことが徹頭徹尾証明されている」<sup>(注8)</sup>と断じたのである。毛沢東の指導の無誤謬性の主張も、この時期に明確な形で現われるようになったようにみえる。『解放日報』は、7月17日に、「毛沢東同志は中国人民の救いの星である——晉西北各界が『七一』を熱烈に記念する」という記事を載せているが、この時点から、しだいに党の機関紙上に毛沢東崇拜の徴候が現われ始めるのである。そして、次の年の7月1日の『解放日報』<sup>(注9)</sup>には、蕭三による「毛沢東同志の初期の革命活動：“偉大な50年”の一章——初稿」が、毛沢東伝への最初の試みとして掲載されたのである。

(注1) 竹内実『毛沢東集』8(北星社、1971年)、187ページ。

(注2) 卡德『論解放区戦場』(香港、新民出版社、1949年)、12ページ。

(注3) 劉少奇「党内のメンシェビズムを一掃せよ」(『劉少奇主要著作集』第一巻、三一書房、1959年)、219ページ。

(注4) Howard Boormann と Donald W. Klein & Anne B. Clark は、1943年に毛が中央委員会と政治局の主席に選出されたとしている。王明は「1943年3月に毛は中央主席であると宣示された」と伝えている。

(注5) 『毛沢東選集』(第1巻、蘇中出版社、1945年)には、かれらの発言が一括して集録されている。

(注6) 『解放日報』、1943年7月8日。

(注7) 王稼祥「關於三民主義与共產主義」(『抗日民族統一戦線指南』9冊)、72ページ。

(注8) 『解放日報』、1943年8月6日。

(注9) 『解放日報』、1943年7月7日には、陳毅の報告がのっているが、その中でも「毛沢東同志の英明な指導」に言及している。

### III 党史の検討

延安整風運動の根底に潜む政治的文脈が、ロシア留学生派に対する批判の論理を媒介として、「毛

沢東の道」の正当性を確立することである以上、整風運動がその最終の仕上げの段階において党史の検討にはいったのは、当然であった。この段階においては、毛沢東の思想と行動は、「遵義以後」をこえて、「遵義以前」にまでさかのぼって、その正しさが主張されることになるのである。1943年7月の劉少奇の言葉を使えば、各種の偏向との闘争を通じた中国におけるマルクス・レーニン主義の発展史が、「客観的には毛沢東同志に集中されている」ことが、証明されなければならなかったのである。その時、劉少奇の言葉を通じて語られた毛沢東の不満は、毛のリーダーシップの正当性についての体系的な理解がまだ不十分なことであり、中共の革命闘争の経験が、「適切に総括」されていないことであった。

中共の党史の検討の出発点となったのは、1942年10月19日から1943年1月14日まで延安で開かれた陝甘寧辺区高級幹部会議における11月17、18日の高崗の報告「辺区党の歴史問題の検討」であった。疑いもなく、毛の指示に従って行なわれたのであろうが、高崗は主席団の一員として、この会議の途中で、「辺区党の内戦後期の歴史上の論争問題を清算し、ボルシェビキの徹底的な自己批判の精神に立って、歴史問題と現在とを検討することを要求した」<sup>(注1)</sup>。高の要求によって「会議の進行の方針は変更」され、会議は11月5日から18日まで辺区党史の問題に集中されたのである。その討議の総括として行なわれた高の報告は、1935年10月までと、さらには1938年頃まで陝甘地域の党にあって被抑圧的ないしは傍流的立場にあった高崗による、陝甘党の以前の主流派に対する糾弾であった。高はそこで、1931年の陝甘紅軍遊撃隊の成立から1935年10月(毛の到着)までの間における李立三路線の影響と政治上、軍事上、政策上、

組織上の左翼日和見主義の路線を批判し、朱理治と郭洪濤を主観主義、宗派主義、党八股の路線を追求したものであると断定したのである。そして、朱と郭の誤った路線に圧迫されていた高崗と劉志丹は正しい路線をとっていたとして、それに対置したのである(注2)。同じ会議で1月に発言した任弼時は、1935年の陝北での「肅反」の問題にふれながら、更に高の非難をふえんして、陝北のこの種の誤った肅反は、「九・一八事変から遵義会議に至る時期において、党内でかつて支配的地位を占めた一種の誤れる路線」(すなわち、ロシア留学生派の、左傾機会主義)を、執行し発展させた結果であるとのべたのである。こうして、朱と郭への批判は、ロシア留学生派の路線への公然たる批判へと拡大されたのである。高崗の報告の後、1943年1月党中央は、1935年11月の決議をとり消し、誤れる指導者たちをようやく失脚させた。西北局は同時に、「地区委員以上の高級指導的幹部は注意して理論を学び、中共の党史の研究を基礎として、しだいに毛主席が指定した30~40のマルクス・レーニン主義の本を熟読する必要がある」という指示を与えたのである。6月末に至って、党西北局は高の報告に「完全に同意し、批准したうえで、これを整頓三風の重要文件の一つに指定したのである。高崗の提起した辺区党史の検討のスタイルは、かくして、それ以後の党史検討のためのモデルを提供したかにみえた。

しかし、1943年7月に至っても、劉少奇は、「なにが真のマルクス主義であり、どんな人が偽のマルクス主義者であるか? これらのことは、中国の革命的大衆のあいだでも、共産党内でも、長年にわたって、まだ完全な解決をえていない問題である」とのべていた。劉は、確かに、その原因として中共の党員の理論水準の低いことに対する不

満をのべたのではあるが、同時に、その言葉の政治的含意は既に影響力を失いつつあり、せまりくる批判に困惑していたロシア留学生派に、“追い討ち”をかけたものでもあったのである(注3)。7月以後の毛沢東崇拜の噴出を経て、1943年の末になると、「党の多くの幹部のあいだでは、過去のあやまった路線の性質にたいして、まだ徹底した清算がなされていなかった」(注4)という状況を生みだしていた党幹部の不十分な「マルクス、レーニン主義の理論的基礎」に対して、毛沢東グループは最終的挑戦を始めた。それは、1945年まで続く全党の高級幹部の間での党史の検討の試みであった。毛沢東はそれらの問題の討論の場の一つであったと考えられる延安での中共の高級幹部会議において、4、5月に「学習と時局」と題する演説をおこなって、指示をあたえているのである。しかし、この段階から、党史研究は約500名の幹部を前にして行なわれた陝甘寧辺区高幹会とは違って、党中央の高級幹部の間でのみの非大衆的な討論に限定されたのである。そして最高指導部の中でいわば密教的な討議が1年以上にわたって継続され、1945年4月の中共の七中全会での党史に関する決議を採択して、党史問題は完結するのである。中共の文献によれば、「この討論は、七中全会——1945年に招集された——のための重要な準備となり、中共はこの大会で、かつてみない思想的、政治的一致をみるに至ったのである」(注5)。

(注1) 『因於陝甘寧辺区党高幹会經過及其經驗的總結』(党内文件, 1943年6月, 西北局), 11ページ。

(注2) 『關於陝寧辺区……』, 13ページ。

(注3) 劉少奇, 217ページ。

(注4) 『毛沢東選集』(北京, 1964年), 942ページ。

(注5) 『毛沢東選集』, 942ページ。

#### IV 毛沢東の思想から「毛沢東思想」への転換

この党史学習運動における毛沢東のリーダーシップの正当性の樹立のされ方を分析することは、「毛沢東思想」の政治的性質を理解する上で、きわめて重要であるように見える。シャピロ (L. Schapiro) によれば、「思想に対する統制を達成することにおけるスターリンの最も重要な業績は、党史の執筆にあった」<sup>(註1)</sup> ように、中共の党史検討の試みが、1938年のスターリンのソ連共産党史の編纂の経験の中国への適用であったことは、当然考えられるところである<sup>(註2)</sup>。いうまでもなく、スターリンの党史は、かれが党内での闘争の後に政治局の完全な支配に成功し、二つの五カ年計画によって工業化と農業の集団化の目標を達し、大粛清を経て、党の一枚岩化をなしたとげた時点で、かれのワンマン独裁体制を正当化することをめざしていた。毛沢東も共産主義の権力にとっての武器としての歴史を必要としたのである。1943年以後の党史研究の目的は、1941年9月の中央党務委員会で、王明・博古への批判がすでに決定し、1942年からの整風運動で党の組織とイデオロギーに対する支配を樹立し、1943年にはカリスマ的指導者として超越的なプレステージを獲得した後における毛の指導権に、無誤謬性の神話を創造することによって、最終的に人為的な粉飾を加え指導権の正当性に、教義上での基礎づけを提供することであった。

党中央内部におけるこの神話創出の過程についての情報はきわめて少ない。しかしこの過程が一年以上を費していることは、討論の難航の可能性を暗示しているようにも思えるのである。なんとすればロシア留学生派の指導に誤りがあったとしても、毛の一貫した無誤謬性の立証を内容とする

党史の政治的な書きかえには、同じ革命闘争の経験を分有した党中央の指導者たちの内部で多くの議論や調整が必要であったであろうからである。

しかし、神話創出の過程の理解への手がかりの一つは、これに積極的役割を果たしたとみられる陳伯達の2冊のモノグラフによって提供されているように見える。陳はかれが1943年と44年の春、中央党校での党史学習に参加した際に、「“湖南農民運動の視察報告”の読みかた」<sup>(註3)</sup>と「内戦時期の反革命と革命」<sup>(註4)</sup>を発表している。前者は1924年～1927年の時期を対象としており、後者は、1927年から1936年までの10年間の内戦時期の政治問題を論じたものである。陳はこれらを通じて、

「もっともすぐれた中国人のもっともすぐれた思想の結晶」である毛沢東の思想の一貫した正しさを主張し、おそらく中共の中で初めてその思想を体系的に再構成することを試みている。陳の議論は、毛沢東の革命戦略と政策を多岐にわたって論じているが、本論の文脈からみると、次の5点が注目し値するのである。第1に、かれは毛沢東の思想の原点を1927年3月の“湖南報告”に求め、さらに毛の独自の戦略的思考の発展的現われを、(1)湘贛辺界各県党第二次代表大会決議案中の第一部分の「政治問題と辺界党の任務」(1928年10月5日)、(2)井崗山前委対中央的報告(1928年11月25日)、(3)1929年1月紅軍第四軍司令部佈告、(4)中共紅軍第四軍第九次代表大会決議案(1929年12月)、(5)給林彪同志的信(1930年1月5日)に基づいて、総括していることである。いいかえれば、毛沢東は陳の言葉を通じて、自己の思想のユニークな精粹を、1927年3月から1930年1月までの論文にあるとみていたのである。第2に、陳は、毛がソビエト運動初期におこなったこれらの理論的仕事は、10年の国内革命戦争の全部の理論と戦略の基礎であ

り、その後の状況の大きな変化にもかかわらず、それらは現在でも非常に大きな実際の意義を依然としてもっているとのべ、そこに含まれる「多くの基本的原則」を長期にわたって革命運動のために応用すべきであると主張したのである。この主張は、さらに続く陳の言葉——わが党の創立以来、中国社会と中国革命の問題を理論上全面的に、完全に、また実際に解決でき、すべての中国の革命事業の前進を長期にわたって指導したのは、毛沢東同志である——によって強められた。つまり、陳は毛の戦略論が中共の革命運動の全時期において主要な指導的役割をはたしたという、誇張された伝説 (legend) をつくりあげたのである。そして、陳は1943年7月の王稼祥の「毛沢東思想」の定義を引用して、毛を中共の「政治的統帥」と「理論的統帥」と呼んだのである。第3に、陳はここで1年後の歴史問題の決議に現われるロシア留学生派への批判の論旨とパターンを、初歩的にはあるが提出している。ここでは陳はロシア留学生派の政策の硬直性を批判し、毛の政策の弾力性の利点を説明し、それに対置している。しかも最も興味深いことに、陳はロシア留学生派の政策への批判を行なった劉少奇の論文——その多くは1945年4月の歴史問題決議に再び引用された——によって、かれの主張を補強しているのである。そして、陳は、「当時劉少奇同志が李立三路線および新李立三路線とこの問題に関して行なった論争は、劉少奇同志が正しく、李立三路線と新李立三路線が誤っていたことが、歴史によって証明された」とのべて、毛沢東と並んで劉少奇の白区路線の正しさを承認したのである。しかし、第4に、1944年5月には、翌年にロシア留学生派の重大な誤りの一つとされた“福建人民政府事件”には、明確な評価は定っていなかったようにみえることを、陳は暴露

している。陳は「ここでは十九路軍事変の時のわれわれの失敗については、分析はしない」とのべて、この微妙な政治的意味をもつ問題の本質の追求を避けている<sup>(註5)</sup>。第5に、陳は“毛沢東同志の思想の特徴”が、マルクス、エンゲルス、レーニン、スターリンの思想及び「当時のコミンテルンの路線」と「まったく同じ」であることを証明するのに大変な努力をはらいながらも、毛の「学習と時局」における主張と符合して、六全大会の欠点にふれている——その内容にふれることなく——のである。要するに、党史学習工作における陳伯達の役割は、1943年7月の劉少奇の言葉をつかえば「メンシェビキ」であると規定されたロシア留学生派からコミンテルンの権威を切り離し、それを毛の思想に結びつけた上で、毛の1924年以来の戦略論の中国における正当性を体系的に説明することであった。陳伯達の二つの論文は、翌年4月の「決議」のための序説であり、中共に残された仕事は、その「決議」において、前指導部の「誤り」をより積極的、体系的にえがき出すことであった。

一方、王明に対する攻撃は、1935年以前の事柄についてとともに、1937年11月の抗日統一戦線政策に関しても始まっていた。高崗は、陝甘寧辺区高幹会の総括報告において——1943年1月13、14日——突然、「大会が未だ討論していない抗戦初期の統一戦線政策中の右傾的傾向を、徹底的に検討せよ」と提議したのである<sup>(註6)</sup>。既にふれたように、抗日統一戦線政策に関する毛と王明との違いは、微妙であるにもかかわらず、政策におけるある種の“失敗”は、王明が責任をとらされたようである。毛沢東も、1944年5月20日の演説で、1938年に一部の同志は「陳独秀路線にいくらか似たあやまりを犯した」とのべ、事実上王明を批判したのである。かくして、王明は、江西、延安両時期を

通じた“誤り”によって、整風運動以後は完全に政治的に没落した。

しかしながら、毛沢東の指導の無誤謬性を証明する歴史問題決議は、いかなる真実を反映したものであったろうか。明らかにそれが権力の武器としての党史である以上、それが党派的な政治的文書としての性質をもっていることを無視することは、あまりにもナイーブであろう。この文書のある種の虚構性を証明するためには、もちろん、江西ソビエト期の中共の活動についての徹底的な研究を必要とするが、それにもかかわらず、今ここでそれほど的確はずれでもないと思われる推定を下すことは可能であるように見える。蕭作良は「江西でいく度か語られた毛沢東自身の言葉は、現在の主張と一致していなかった」(註7)ことに気づいているが、わたくしの一連の議論によって既に明らかかなように、毛の思想は、未成熟と未分化の状態からの漸次的進化と新しい状況への適応の過程をたどっていることが、再び認識されねばならない。毛の思想の進化と中共のイデオロギー水準の発展という見地に立てば、この「決議」は、江西ソビエト期の党の指導の経験や誤り——それとの毛沢東の関係は重複と違いを含んでいてあいまいである——を、実際にはその時期の毛沢東の思想と行動に照らしてではなく、1945年に中共が到達していた成熟した戦略的理解に基づいて、再検討したものであったとして理解されるべきである。

毛の理論と行動が、相対的には当時最も有効であったとしても、この「決議」は、1941年の劉少奇の言い方をすれば、毛を含む党全体の共同の反省的総括であった。そして、それが作為的に「誤った王明——博古路線」と“正しい毛沢東——劉少奇路線”の対比という形式を通じて、表現されたのである。したがって、それは中共のイデオロギーの方

向づけの明確化という実践的必要性に応えたものであると同時に、反面では、カリスマ的指導者のための一種の政治的儀式(“誤れる指導者たち”には必ずしも実質的打撃の加わらない)でもあった。事実、博古(註8)、張聞天、王稼祥は延安整風運動以後も、毛の信頼あつち有力な協力者であった。しかし、例外としての王明のみは、瑞金滞在の期間も短いにもかかわらず、その時期の誤れる指導の主要責任者とみなされ、また延安時期におけるかれ自身の理論と行動を含めて、張国燾、項英の抗日統一戦線政策での誤りの責任を追求され、屈辱的地位に落ちこむのである。

毛は党史学習への態度として、1944年4月に、「思想闘争」を徹底的に行なうことと同時に、「同志の結集」の二つをあげているが、毛沢東の「寛大な方針」が生まれてくる一つの理由には、このような党史検討の政治的メカニズムがあったのである。しかし、過去の党の政策についての批判と自己批判は、他の指導者たちには適用されたとしても、毛と劉少奇については、除外されたことも事実であった。

1945年5月に召集された中共の七全大会は、劉が毛を「天才的、創造的なマルクス主義者である」という最大限の賛辞を呈したことでよく知られているが、毛の人と思想に対する賛美で埋められ、毛沢東、朱徳、劉少奇の三報告を通じて、中国革命の経験が総括された。これらは政治、軍事、党の建設についての「毛沢東思想」の要約でもあった。新しい党の規約には、「毛沢東思想が党のすべての工作の指針となる」ことが書き込まれた。かくして、党史の検討を経て仕上げられた「毛沢東思想」という言葉で呼ばれるようになった「一つの教義」(doctrine)は、毛自身の思想そのものではないより大きな内容を含んだ党の公式のイデオロ

ギーとなった。それは中共の革命運動の中で生み出されたあらゆる価値と叡知を包含したものであった。それは党の願望を反映した「党の神話」であった。この「思想」は、四つの要素によって構成されているように思える。すなわち、(1)陳伯達が特別の価値を認め、B・シュウオルツ (Benjamin Schwartz) が“Maoism”というアカデミックな概念を構成する上で基礎とした1927~30年までの毛自身の思想および、それを基礎として進化した1945年までの毛自身の思想の有効性を依然として主張する部分、その中には毛の思考方法、理論、政策、作風などがある。(2)毛以外の指導者たちの有効性を実証した戦略と思考方法。(3)革命根拠地で形成された中共党員の価値観、態度、精神 (spirit)、行動様式のある部分 (特に、1941~43年までに形成された)。(4)一般的にマルクス・レーニン主義からの継承部分である。

それ故、この公式イデオロギーは、もはや体系的に説明するためには、あまりにも多様な要素を含み、あまりにも無定形でバク然としたもの(思想)となってしまった。1943年7月に劉少奇が創り出したこの言葉の含意は、1945年には変化してしまったのである。その思想はもはや、その無体系性の故に、最高指導者毛の恣意によってのみ、その運用と適用が決定されるものとなった。1945年の毛沢東思想は、政治指導者としての毛の卓越性によって創出され、他方においては、毛の卓越性を支える神話となった。それはまた偉大な指導者の栄光と、運動にとっての政治的必要性によって、誇張された速成の神話と呼ぶこともできよう。

(注1) Leonard Schapiro, *The Communist Party of the Soviet Union* (New York, 1960), p. 465.

(注2) 『解放』は1939年からソ連共産党の新しい動向を精力的に伝えている。第105期(1940年4月30日)、第128期(1941年5月15日)には、スターリンの『ソ連

共産党史』の研究についての記事がある。

(注3) 『学習』、1951年8月1日に収録されている。

(注4) 陳伯達『内戦時期的反革命与革命』(党内幹部読物、1944年5月1日)。この資料は1953年に徹底的に書き改められて『関于十年内戦』というタイトルで出版されている。

(注5) 陳伯達、42ページ。

(注6) 『関于陝甘寧……』、21ページ。

(注7) Hsiao Tso-liang, *Power Relations within the Chinese Communist Movement, 1930-1934* (Seattle, 1961), p. 303.

(注8) 博古は延安では財政問題を担当する最高責任者であって、1944年初めには、博古がその後、批判の対象になるだろうとは、全く予想もできなかったし、博古の重慶への1945年の派遣は、毛のかれに対する信頼を示すものであると、John Service は筆者に語っている。

## V シンボル創出の対外的条件

延安整風運動を通じて「毛沢東思想」という革命運動の象徴が浮かびあがると平行して、その「思想」の体現者としての毛沢東その人も、運動の象徴となったことを、われわれは主として中共の根拠地内部の政治的条件から明らかにした。だが、この時期の毛のリーダーシップがおかれていた外的条件もまた、毛を事実上の国家を統合する象徴に押し上げるように作用していた。その一つの条件は、国共関係の悪化であった。それは毛に自らを蒋介石の対抗勢力として強く意識させた。1943年7月以後の『解放日報』における蒋介石の新著『中国の命運』に対する批判は、そうした中共の対抗意識の現われであった。中共は8月末に「共産党なくして、中国なし」という国民党に対してきわめて挑戦的なスローガンを公然と掲げたとし、1944年初めの鄧子恢の論文は、「毛沢東路線」と「蒋介石のファシズム」を対比していた(注1)。一方、1941年の日ソ不可侵条約の締結は、中共に自立性の必要を



痛感させたであろうし、1943年5月のコミンテルンの解散は、実質的には、「中国のマルクス主義」を発展させることを奨励していた。これに応じて、劉少奇は1943年7月には、もう、ソ連を意味する「遠くはなれた外国における革命の経験だけを学習する」ことの不十分さを指摘していた。これらの環境の変化は、中共の支配地域において、独立した自己の権威を樹立しようとした毛の意欲を、刺激したであろう。毛は1944年5月には、初めて、1928年の中共の六全大会の「欠点」を指摘し、間接的方法で、権威の所在地をスターリンから中国の側へ、すなわち毛自身へと移し始めたのである。毛はこうすることによって、党が必要としていた革命運動の象徴に自らになったのである。党内における毛崇拜は、辺区の大衆の間に拡大されていった。1944年に陝西省の農民によって「東方紅」という毛を賛える歌が作られたのは、偉大な指導者毛についてのイメージが、農民のレベルにまで滲透していたことを示すものであろう。強い抗日意識を植えつけられた農民と多くの党のカードルと兵士(その90%は農民出身であった)の中にあっては、毛のイメージは共産主義者のそれであるよりは、むしろ、新しい中国を切り開く民族の解放者、または事実上の国家(それは19の辺区と約1億人の人口を有した)の英雄としてのそれであった。

(注1) 新四軍第四師政治部出版『私曉雜誌』(No. 7, 1944年1月)の鄧子恢「整風論訓隊時事討論總結報告」。

## VI 党指導部内での毛の思想の評価

七全大会は、R・V・ダニエルスの言葉を借りれば、中共が「単一思想の体制」(A one-idea system)にだけでなく、「単一人物の体制」(A one-man

system)に向かって移行する公式の転換点であった(注1)。上述のように、新しい党規約は、党員がかれらの信条体系の核心に、特定の指導者の名前と結びついた人格化されたイデオロギーを、信奉しなければならないことを規定していた。そして、毛沢東は、1945年4月に党中央委員会、中央政治局、および書記処の主席に選出され、次いで6月中国人民革命軍事委員会主席に任命されるや、党の組織と軍隊に対するかれの一元的な支配権は、最終的に不動のものとなったのである。かくして、七全大会は、1935年以来10年を費した毛沢東の権威の形成過程の頂点をなすものとなったといえよう。

しかし、本稿によって、延安時期における毛のイデオロギーとリーダーシップの進化の過程についての一連の概観を終わるに当たって、われわれには、一つの重要でしかも微妙な問題が、最後に残されているように思えるのである。それは、整風運動以後の中共党内において、毛沢東自身の思想と、毛の同僚たちの思想との動的な相互作用は、より微視的にみると、現実には一体どういう問題を含んでいたのか、という問題である。

既に確認されたように、理論と政治行動の局面で「毛沢東の道」の独自の価値が、党の指導者たちの間で公然と承認されたのは、やっと1942年の中期に至ってからであった。しかも、それは毛の戦略思想の形成が終わった1940年1月からさらに2年以上を経た後の出来事であったのである。したがって、ここから一つの推論を導き出すとすれば、毛の理論的著作は党の内外でよく知られていたにもかかわらず、その傑出した価値は、それらが出現してずっと後になってから、やっと再発見されねばならなかったのである。事実、1942~43年にかけて、毛の同僚たちが初めて毛の代表的な著作であ

るとして列挙したものは、その時期に書かれたものではなく、整風運動以前の四部の著作であった。つまり、「持久戦論」、「新段階論」、「『共産党人』発刊の詞」と「新民主主義論」である<sup>(注2)</sup>。しかし、こういう「再発見」のされ方それ自体が、毛の同僚たちがかれの著作の実際の理論的価値に対する評価を、急速かつ徹底的に変化させたのか否かについて、われわれに疑いをいだかせる理由を秘めているように思えるのである。しかも、陳伯達が毛沢東自身の思想の原型を発見した1927～30年の時期の毛の著作は、1943年末までは、同志たちの間で注目を集めていたようにもみえないことも、われわれの疑問にとって無視できない徴候である。現存する『毛沢東選集』の中では最も古い版であるとして知られている1944年5月の晋察冀日報社編の『毛沢東選集』には、「湖南農民運動報告」と「古田会議への報告」のみが集録されており、他はすべて1937年以後の著作からなっていることも、想起されるべきであろう<sup>(注3)</sup>。確かに、毛沢東は1942年4月に、全辺区の部隊に古田会議の決議を研究するように指令しているが<sup>(注4)</sup>、これを例外として、1920年代末期に書かれた毛の一連の著作が再版されたのは、1944年2月の『弘曉雑誌』第八期からであるように思えるのである<sup>(注5)</sup>。

このような事実から、われわれは、1943年には「毛沢東思想」という党のシンボルが出現していたにもかかわらず、毛沢東が1920年代からの党の「理論的統帥」であることを「実証」するためには、「政治的統帥」であることを実証することよりも、もう少し多くの時間と努力が必要であった、と推定しうるであろう。陳伯達の1944年5月の次の言葉は、この問題との関連で興味深いのである。すなわち、

「毛沢東同志を革命の実際行動家であるとしか認めなかったり、あるいは、抗戦時期になってから初めて理論家になったので、それ以前はまだ理論家ではなかったとするのは、歴史的事実に完全に合っていない」<sup>(注6)</sup>。

陳はこの時期においてさえも、毛を理論家としてよりも、実践的な戦略家として評価する態度が、党内にかなり潜在していたことを暗に示唆しているようにみえる。既にのべたように、劉少奇は1943年以後、毛を偉大な思想家あるいは理論家へと昇格させるように努力をはらったけれども、その劉すら少なくとも1942年頃までは、毛を理論家として非常に高く評価しているようには、みえなかったのである。その時期までには、毛は既に疑いなく、党の指導部の中において、最も有能で信頼しうる政治指導者としての威信を獲得していたに違いないけれども、かれの思想のイデオロギー上での權威に対する党の指導者たちの評価が、真に「革命的な変化」を遂げたのか否かは、依然として若干の疑念を残すのである。

(注1) Robert V. Daniels, "Stalin's Rise to Dictatorship, 1922~29," in *Politics in the Soviet Union*, Ed. by A. Dallin and A. Westing, p. 17.

(注2) 1943年に王稼祥がこの四部作に言及しているが、他の指導者もその中のいずれかを挙げている。

(注3) これは、抗日戦争と整風運動という当面の課題を反映したものであるという解釈も成り立つ。

(注4) 『解放日報』, 1942年4月15日。

(注5) 『弘曉雑誌』, No. 8, 1944年2月, No. 12 (不明)。

(注6) 陳伯達『内戦時期…』, 65ページ。

## Ⅶ 毛沢東の思想の凝集力

中共の最高指導部内で、毛沢東のイデオロギー的地位がどの程度強固であったのかについてのわれわれの疑念は、次の問題、つまり毛に対する指

導者たちの二面的 (ambivalent) な態度と、かれらのイデオロギー上での毛との微妙な違いの徴候を検討することによって、更に強められる。たとえば、朱徳は七全大会への報告においては、劉少奇に較べて、毛沢東崇拜に対してははるかに冷静な態度をとって、両者の歩調の不調和を示している(註1)。その劉少奇も、奇妙なことに、七全大会召集の直前である1945年4月の別の場所での演説では、決して毛沢東崇拜を鼓舞してはいないのである。その劉の演説は、「婦人の活動」を論じながら大衆路線の原則を説明したものであったが、ここでは劉は反対に、敢えて次のような発言すら行なったのである。

「人民はけっして、英雄や豪傑や、皇帝や、神仏によって、解放されるものではなく、人民自身の手ですくわれるものである。ところが、われわれの同志のなかには、この点を理解せず、大衆の上ののっかって、大衆を解放しようとするものがある。これは恩をほどこすという搾取階級の見地である。歴史は決して英雄によって創造されるものではない」(註2)。

この劉の言葉は、かれが1941年の論文において示した指導者と党組織との関係についてのかれの観念を、この段階においても依然として捨ててはいないことを明らかにしているのである。しかも、この演説で、劉はレーニンとスターリンを引用してはいるが、毛沢東には言及していない。これらのことから、劉の毛沢東崇拜の推進者としてのイメージからは、ほど遠いというべきであろう。

劉少奇のイデオロギーの分析は、本稿の主要なテーマではないので、それについての議論はここでは限定せざるをえないが、それにもかかわらず、毛沢東と、この劉という毛にとって最も有力で密接な同盟者となった人物との間にあった微妙なイ

デオロギー的差異に言及しておくことは必要であろう。というのは、この差異こそは、1950年代からの中共の指導部内における潜在的葛藤を生みだした主要な要素の一つであったからである。既に数人の学者たちによって検討されているように(註3) 両者の差異は、それぞれのパーソナリティ、社会化、中共に加入する以前の青年時代の体験および革命運動での役割などにおける差異を、反映したものであると考えられる。それらは次のいくつかの中心的論点に概括されうる。すなわち、(1)劉は中国革命における労働者階級の指導的役割を早くから、一貫して重視しており、農民の役割を軽視していた。これに対して、毛は1926年9月以来、農民を革命にとって最も頼りになる勢力であるとみなしていた(註4)。(2)劉は一種の「組織人」であったし、毛は党を物神崇拜の対象とはしないむしろ超組織的な政治家 (politician) タイプの人間であった。(3)劉の理論的立場はボルシェビズムの正統的理解の上により一層依拠していたが、しかし、劉は党内問題の処理の方法においては、スターリンの模倣者ではなかったし、大衆指導に関しては「柔軟路線」の提唱者であった。たとえば劉は民主集中制について、「民主は手段であり、集中が目的である」(洛甫) というような解釈は、とらなかった。劉は繰り返えし、大衆の自発性の重要性に言及し、指導の漸進主義と柔軟性を強調した。一方、毛は大衆の「発動」という言葉に示されるように「柔軟」と「強硬」の両路線を内包した指導の理念をいっていた(この点に関しては、劉はこれまで誤解されてきたように思える)。

だがこうした違いに加えて、中共内部の勢力関係に対する劉の態度の最も顕著な特徴が、その独立性にあったことが、ここで注目されるべきであろう。すなわち、劉は延安時期の前半を通じて、

毛沢東にもロシア留学生派にも等距離を保持していたし、1940年代においてすらも、劉は基本的には“独立的思考の持ち主”としての態度を保ちつづけていたように思えるのである。

しかしながら、劉と毛によって代表される党の最高指導者グループの内部におけるこれらの微妙なイデオロギーの差異は、それぞれが個別的に、1949年以後における中国の政治的發展に重大な関連をもっていると解釈するならば、中心的な問題点を見逃がすことになる。わたくしが、ここで最も重大な意味をもっていると考えるのは、毛の七全大会への報告『連合政府論』の中で表明されているかれの政治についての全体的理念と、かれの同僚たちとの対応関係である。毛はこの報告の中で、「人民戦争」というかれの言葉で表現される政体 (polity) のある一定の状態を概念化している。そして、その状態は毛の観点からすれば、敵に対抗する解放区を運営するには、最も有効な方法であるとみなされたのである<sup>(註5)</sup>。毛の説明によれば、そのような政体の状態とは、政治、経済、社会、文化、軍事の全領域を包含する全面的な大衆動員の状況であると考えられよう。こうした動員状況は、かれのポピュリスト的特性、軍人精神、ゲリラ的精神的風土に根ざした政治的理念や構想を、満足せしめるものであったに違いない。しかもここで想起されねばならないのは、1941年以来、解放区で達成された目ざましい立ち直りが、毛沢東の卓越したリーダーシップの出現と平行的に発生していたということである。二つの新しい状況の同時的発生は、次のような推論を可能とするように思われる。つまり、「人民戦争」型政治の有効性は、毛の指導権の正当性そのものと深く係わっており、当然ながら、大衆動員の成功にかける毛の期待は大きく、その有効性の実証は、毛

に対しては大幅に増幅された心理的影響を与えたと考えられる。そこでは人民戦争型政治こそ毛の指導権の正当性を支える基盤であるとして意識され、それは絶対化されたのである。かくて、それは毛自身の重大な「政治的財産」となり、C・ジョンソン (Chalmers Johnson) の言葉を使えば、「独立変数として」<sup>(註6)</sup>、その後の国家建設に適用されることになったのである。

しかしながら、ここで注目すべきことは、毛が最高の指導的地位に立つことによって発展させるに至ったこの人民戦争についての観念は、他の中共の指導者群のそれについての観念と、同一ではないかも知れないということである。なんととなれば、かれらは毛の指導権のもとで、それぞれ異なった役割を果たしたのであって、それ故にまた人民戦争の観念に対しては限定的な関与を行なったからである。両者の微妙な相違については、さらに詳細な研究が必要であるが、ここでは特に、劉少奇が「人民戦争」型政治を万能薬 (almighty) であるとはみなしていなかった、と推定しておいても誤りではないように思えるのである。

当然のことではあるが、毛沢東は当時の中共が当面していたさまざまな課題を処理するために、自分の下で働く多様なタイプのサブ・リーダーを保有する必要があった。かれらの中には、いわゆる「連帯感の創出者」 (the solidarity-makers) もいれば、「官僚」 (the Bureaucrats) も含まれていたであろう。けっきょく、延安後期の中国共産党の指導部の特徴は、毛沢東という有能な大戦略家でありかつまた魅力的な人格を備えた指導者のもとに、相互に強い連帯感を形成しながらも、微妙なイデオロギー上での多様性が許容されていたということであろう。

だが、これまでに明らかにされた毛の権威形成

の政治的メカニズムと、かれのリーダーシップの性質は、党に対する毛の支配の強さと同時に弱さをも示唆しているように思えるのである。既に明らかかなように、毛は自己の超越的權威をかれの有力な同盟者たちの承認と協力を通じて達成したのであった。この過程では、毛の同盟者たちは、毛を積極的に象徴的地位に押し上げるべく努力を傾けたのであった。しかも、達成された毛のカリスマ的指導は、最高指導者たち間での民主的で友好的な人間関係を基礎として、機能していたのである。そこでは政策決定は、十分な討論を経て行なわれていた。これらの条件は、おそらく、毛の立場をより強力かつ安定したもの（広範な支持集団の存在の故に）としたであろうが、反対に、それは毛の指導を、事実上、同僚たちからの「集団の圧力」の影響をより受けやすいものとしたであろう。R・ローズ (Richard Rose) は、「党の指導者はしばしば主張される程には強力ではないようにみえる。かれはまたよき服従者でもあらねばならない」(注7)と書いたが、これは毛沢東の場合にもあてはまると思われる。

また、毛のカリスマ的指導は、スターリンが自己の見解を党に押しつけるのに、自らが保有するより静態的な党の組織上の権力に大きく依存したのに反して、毛の場合にはよりダイナミックな大衆動員を通じて達成されたのであった。だが、この発生の基盤の変化は、毛のカリスマ的指導に大きな影響を及ぼさざるをえなかったであろう。危機と大衆動員が一度終息するや、それまで維持されてきた毛の權威を、不変のままに保持することは困難であろう。1950年代に起こったような緩和と制度化の進行は、毛の人格化されたリーダーシップを衰退に導く可能性を秘めていたとみることができる。新しく異なった環境のもとにおいて、

指導者群の内部における毛のカリスマの「証し」が曖昧となる時、毛の指導権は、元来かれ自身の思想の卓越した価値について完全には納得していないと思われる同僚たちからの「集団の圧力」に、より一層さらされることになるであろう。この場合、「人の独裁」と「思想の独裁」はしだいに分離され、「毛沢東思想」の象徴としての機能が維持されることになるのである。しかし、それに対する最高指導者の反逆もまた起こりえたのである。

(注1) 朱徳もその報告の中で、毛にしばしば言及しているが、表現はかなり簡単で冷静である。

(注2) 劉少奇「婦人活動の総括におけるいくつかの基本的認識」, 1945年4月。

(注3) Benjamin Schwartz, Stuart Schram, John Lewis, Tang Tsou, Maurice Meisnerなどは、この問題について、いくつかの論文を発表している。

(注4) 毛沢東「国民革命と農民運動」(1926年9月15日), 『農民運動』, 中国国民党中央執行委員会農民運動編集部, において、毛は既に農民重視の観点を明示している。

(注5) 『選集』, 1964年, 1038~1042ページ。

(注6) Chalmers Johnson, "Chinese Communist Leadership and Mass Response: the Yen'an Period and the Socialist Education Campaign Period," in *China in Crises*, vol. 1, Ed. by Ping-ti Ho and Tang Tsou (Chicago, 1968).

(注7) Richard Rose, "Complexities of Party Leadership," in *Parliamentary Affairs* (Summer 1963), p. 257.

(調査研究部主任調査研究員)